【インタビュー】ソプラノ歌手

鮫島有美子さん

入会して少し安心した感じがします

インタビュアー・構成／会報編集・郡司　武
写真／水村　孝
協力／東京ガーデンパレス

日本を代表するソプラノ歌手として、国内外で幅広く活躍する鮫島有美子さん。尊厳死協会に10年ほど前に入会され、その後、ご両親を看取りました。その最期について、いささか悔いも残るという胸の内や、ヨーロッパと日本の「延命措置」に対する考え方の違い、さらには美空ひばりさんへの「オマージュ（敬意）」などについても語っていただきました。

――昨年発売されたCD「ひばりさんへのオマージュ」を、この間、車を運転しながら聴いていました。素晴らしいですね。美空ひばりさんとはまた違った、鮫島さんの歌の世界がありました。その話はあとでまたお聞きするとしまして、鮫島さん、今はずっと日本ですか。

鮫島　コロナになる前から、ここ8年くらいは日本ですね。それまではウィーンやドイツと日本とを行ったり来たりでしたが、母のこともありましたし、2015年に今の上皇陛下、上皇后陛下のお作りになった沖縄を思う「歌声の響」というCD付ブック（朝日新聞出版）の仕事も重なったりしましたので、ウィーンから日本に拠点を移しました。

――お母さんの介護などもあったわけですね。

鮫島　そうですね。介護というか、当時、父が亡くなり、母も年老いてきていましたから。ひとりっ子でもありましたし。

「最期はリンゴとニンジンのジュースに青汁を一杯」

――鮫島さんご本人は、2012年3月に尊厳死協会に入会されていますが、ご両親のことなどがきっかけになったのですか。

鮫島　突然入会したというわけではなく、それまで、管で繋がれた「スパゲッティ人間」のようになって生きていくことに対して、それはどうなんだろうとか、しばしば考えてはいたんですね。そんな時にどこかでたまたま尊厳死協会の存在を知ったんです。いつなんどき何が起こるかわからないわけで、尊厳死協会のカードを持っていればやがて役に立つのかな、と。入会して「これで少し安心した！」という感じがしたのを覚えています。

――そうでしたか。ひとりっ子であったことも背を押したでしょうか。

鮫島　そうかもしれませんね。従妹や親戚はいますが、みんな私と同じ年代ですし……。自分のことは自分で考えないと、と。

もう30年以上前になりますが、母方の祖母が99歳10か月で大往生しました。日本に帰ってくると会っていて、亡くなる2か月前にも母と3人で祖母の部屋で会ったんです。頭ははっきりしていましたし、自分で食べることもできました。行った時、大好きなうな重を半分ペロッと食べたのを見て、帰り道、母と「あんなに食べて大丈夫かしらね」とびっくりしたのを覚えています。子どもや孫、ひ孫と暮らしていて、自分で食べることもできる。そういう状態で少しずつ食べる量も少なくなり、やがて自宅で自然にさりげなく亡くなる―祖母はそのような最期でした。私も従妹たちも、そういう最期が「当たり前」のように思っていたんですね。

――それまで「死」に多く向き合ってきたわけではなかったでしょうし、特に当時は「当たり前」と思いますよね。

鮫島　今でも祖母の最期のあり方、存在は大きかったと思います。

――お父さんの最期はどんなでしたか。

鮫島　父も大往生でした。94歳。亡くなって9年になります。両親とも自宅に居たかったんでしょうけれど、いろいろ日々の生活に支障も出てきましたので、2人して同じ施設に入りました。「サ高住」といわれる3部屋ほどある施設。父はペースメーカーを入れていま

したが、それ以外は元気でした。

――鮫島さんも頻繁に帰国されて施設に向かったんですか。

鮫島　そうですね。最初は2、3か月に1度くらい帰国して会うという頻度でしたが、最期の頃は3週間に1度くらいでしたね。だんだん食べる量が減ってきまして、それも好きなものだけになり、最期はリンゴとニンジンのジュースに青汁を1杯入れるというような感じでした。それと生卵を1日に4個。軽くしょうゆを垂らして。そうするととろみが出て体に入りやすかったんでしょうか。固形物を食べると、むせたりしたようです。自分なりに調整していたんでしょうね。

――かろうじて生命を維持できる程度のものだけを、ご自分で判断して摂っていたということですね。

鮫島　そう思います。亡くなる1か月ほど前でしたか、施設の責任者の方が部屋にみえた時に、父は自分から「管に繋がれたようにして生きるのは嫌だ」ってはっきり言ったそうです。それまでそんなことを話したことを聞いたことはありませんでした。

――最期が近づいてきていることがわかっていたんでしょうか。

鮫島　そうじゃないかと思います。ですから施設の方からも「大往生でしたね」って言われました。私はイギリスで仕事があり、日本に戻ってきて、最期にぎりぎり間に合いました。

「3%にかけるか悩んだ末での決断でした」

――残されたお母さんは、その後もその部屋に住まわれていたんですか。

鮫島　最初はそうでしたが、父より6つ下の母は、それまで気が張っていたんでしょうね、「しっかりしなくちゃ」と。その後、少しずつ認知症のような気配が出てきまして、同じ施設の「介護棟」に移りました。飲み込む機能が衰えたり、膀胱炎にもなりました。車いすで外に散歩などはできましたが、尿路感染症は凄く高熱になるんですね。病院に運ばれて点滴を受けたり、寝たきりになって衰えた筋肉のリハビリもしましたが、母は「生命維持装置みたいなものに繋がれて生きていたくはない」という考えの人でした。

――言葉にして話されていたんですか。

鮫島　そうです。たぶん母は、そういうような話を父としていたんだと思います。娘である私とは離れて暮らしていましたから「面倒は見てもらえないね」という前提で話していたのかもしれません。私は1976年にヨーロッパに行き、そこで結婚し、ウィーンで暮らし、仕事もしていましたから。

――遠くに住む娘を思いながら2人でそう話していたのでしょうね。

鮫島　母は「延命措置は要らない」という一方で、「生きる」ということに関しては強い意思を持っていた人だと思います。母はやがて、口からの栄養摂取が難しくなりましたが、意識ははっきりしていました。

――栄養はどういう方法で摂られていたんですか。

鮫島　病院で鼻管栄養でした。

――食べ物をうまく飲み込めない場合などに一時的に行われるんですよね。

鮫島　鼻から管を入れての栄養摂取ですから、嫌がって管を抜いてしまったりするんですよね。今思うと、鼻管を止めて、口から食べることだけを選択してあげたほうが良かったかな、と。そうしたら喉の機能も少しは回復して、自然な形での終わり方もできたのかな、と思ったりもします。

――なるほど。難しい選択ですね。

鮫島　私も24時間付いてあげられる状態ではありませんでしたし、母も栄養補給だけのためにずっと入院していることもできませんから、新しく施設を探したんですが、鼻管栄養をしてくれる施設は多くないんですね。胃ろうは多いんですけれど。それでやっと見つけて移ったんです。ですけど鼻管栄養は何年も管を入れておくようなものではないと言われ、とはいえ口から栄養を摂ることもできない状態がクリアになっていたので、いろいろお医者さんと話して「胃ろう」を選択したんです。あとで知ったんですが、胃ろうをしつつ、やがて回復して口からまた食べられるようになるのは、高齢者の場合わずか3%くらいらしいですね。その3%にかけるか悩んだ末での胃ろうの決断でした。

――お母さんは、胃ろうについては、どう思っておられたのですか。

鮫島　胃ろうをしたことを母には言いませんでした、というか言えませんでした。相談したら「胃ろうは嫌」と言ったと思うんです。それはわかっていました。

――胃ろうをすれば、食べたりする満足感や咀嚼感はないでしょうけれど、体力的には維持されるんでしょう?

鮫島　そうですね。体力的には元気になっていて、施設の近くの隅田川に二年続けて毎日のように桜を見に車イスで行くこともできました。胃ろうのおかげとも言えますよね。

――ほんとに、そう言えますよね。

鮫島　母は胃ろうによって栄養状態が良くなり、「生きたい」という気力もわいてきたように思います。それと私に対してよく言っていたのは、「自分が死んだら、あなた一人になっちゃって可哀そうね」っていうことでした。

――そうですか、その娘への深い思いが、生きる張り合いだったわけですね。有美子さんも、その思いはひしひしと感じていたのでしょう?

鮫島　その時は、あまり…（笑い）。

母はその後、体が受けつけなくなり、胃ろうの分量も少しずつ減ってきて、父と同じように枯れるように亡くなりました。2019年、歳も同じ94歳でした。

――そうでしたか。

鮫島　今思うと、鼻管を外して口からの栄養にもっていったらどうだったんだろうとか、後悔というか、母にとって何が良かったのか、今でも思い悩むことはありますね。

「食べられなくなったら自然の摂理」

――最期のあり方については、ウィーンなどではどうなんですか。

鮫島　母の亡くなる1年前に義理の母が亡くなり、義父はその前に亡くなりましたが、日本との違いはあまりにも顕著でしたね。点滴などをすれば少なくとも何か月かは元気に生きていられたと思うんですけれど、基本的には「食べられなくなったら無理に栄養を入れることはしない」という考えです。

「管で繋がれた状態で生きていくことに対して『それはどうなんだろう』とか、しばしば考えてはいました」

「ひばりさんは音域がすごく広いので、とても歌えない歌というのもあるんですよ」

義父の場合、痰の絡まる咳をしていたんですが、痰の吸引もよほどでない限りしないんです。看護婦さんに「自分の力で痰を出す、ということにならないと体が良くなりませんから」と言われました。びっくりしました。

――日本ではありえないですね。

鮫島　そうなんです。それで最期はそこから退院して、自分の部屋で、食べる量もだんだん減ってきて、眠っているような状態になり、枯れるように亡くなりました。

――向こうは「延命措置」などは考えないんでしょうか。

鮫島　家族も誰もいっさい考えないですね。「食べられなくなったら自然の摂理」という考え方です。

「本能的な感情の入れ方とか声の使い方」

――それで、美空ひばりさんですが、「オマージュ」のCDは、どういう経緯で生まれたんですか。

鮫島　たぶん、プロデューサーの方が、私が自分の世界を作れる曲を選んでくれたと思うんですね。「柔」とか「悲しい酒」とか「みだれ髪」とか「車屋さん」とか名曲はたくさんありますけれど、それらはこのCDには入っていないんです。

――「越後獅子」から始まるのを聴いて、哀愁を帯びたストーリーから入るのか「なるほど」と半ば納得した気もしました。

鮫島　小さいころからラジオでひばりさんの歌はすごく聴いていて、体に染みついてしまっていたんですが、今回、それをまず無くさなければ……。

――1回洗い流して向き合われたんですね。

鮫島　そういうことですね。洗い流して洗い流せるもの、つまり私の世界が入る余地のあるもの、という歌を選んでくれたと思うんです。ひばりさんは音域がすごく広いので、とても歌えない歌というのもあるんですよ。ですからこの話が出たときに「とても無理」と思ったりもしました。

――そういうことでしたか。

鮫島　ひばりさんは、音楽に対する本能的な感情の入れ方とか感覚、声の使い方とか、ほんとに凄い人だったとあらためて思います。

――なるほど。今日は、ご両親の最期について、終末期に対してのヨーロッパなどの考え方、さらに美空ひばりさんへの思いなど多岐にわたってお話をうかがいました。ありがとうございました。

さめじま・ゆみこ

東京生まれ。東京藝術大学声楽科、同大学院修了。1975年、二期会オペラ「オテロ」のデスデモーナ役でデビュー。ドイツを拠点にヨーロッパ各地で活動を始め、1982年、ドイツ・ウルム歌劇場の専属歌手に。1985年、初アルバム「日本のうた」を発売。1990年、NHK紅白歌合戦に出場。1992年から2008年まで日本の代表的オペラ「夕鶴」の“つう”を演じる。2009年と2019年の天皇陛下御在位20年記念式典と30年記念式典では「祝いの歌」と美智子皇后（現・上皇后）作曲の「おもひ子」を歌う。CDに「ザ・ベスト鮫島有美子が歌う日本のうた」など多数。CDブックに「おもひ子」（マガジンハウス）、「歌声の響」（朝日新聞出版）、「美智子さまと星の王子さま」（文藝春秋）。

インタビューを終えて

透き通った声で、ご両親の最期などについて語るのを聞きながら、鮫島さんのライフストーリーがくっきりと浮かび上がるようでした。99歳の祖母宅を訪れて母と2人で帰る際に交わす言葉や、「自分が死んだら、あなた一人になっちゃって可哀そうね」と娘を思いやる母の言葉、さらに美空ひばりさんを語る時の熱い思い……それらが、まだ残響のように耳に。

会報編集・郡司　武

※鮫島有美子さんは6月から日本尊厳死協会の顧問に就任いたしました。